

【報告】韓日学術フォーラム

「日本文学、その可能性」

福田安典・姜錫元・飯倉洋一・海野圭介
(国語教育研究室) (東国大学校) (大阪大学大学院) (大阪大学大学院)

尾崎千佳・川崎剛志・川端咲子・近衛典子
(山口大学) (就実大学) (神戸女子大学(非)) (駒澤大学)

佐藤明浩・近本謙介・盛田帝子
(都留文科大学) (天理大学) (相愛大学(非))

2003年8月4日に、韓国東国大学校において、「日本文学、その可能性」をテーマとした韓日学術フォーラムが開催された。これは、東国大学校の姜錫元氏が「上田秋成の研究 朝鮮をめぐる秋成国学の世界」(책사람, 2003)を出版されたことを契機としている。というのも、同著は韓国における「縦書き」の「日本語」による古典研究書の嚆矢であるとともに、海外で出版された最初の上田秋成研究でもあるからである。その画期的な出版を契機として、今後も海外における日本文学研究が発展していくことは自明のことであると思われ、東国大学校の学生・院生及び韓国の日本語日本文学研究者を対象として、日本文学のジャンルや時代を超えた研究者が集い、フォーラム(公開討論会)を開催する機運が生じたのである。本稿はその概要報告である。

1 はじめに

「日本文学」という概念規定には様々な要素が混在している。ジャンルで言えば、散文、韻文、芸能という大きな区分が可能ではあるが、その実、その区分にも明確な区切りがあるわけではない。加えて、研究領域が細部もしくは広範に展開するにつれて、従来は日本文学では扱われなかった資料をも視野に収める研究が姿を現してきている。ところが、その一方では、同じ「日本文学」を扱いながらも、立脚点を異にする研究領域が存在する。その好例が、姜錫元氏の一連の業績であって、すなわち韓国という視点から上田秋成もしくは「日本文学」を照射しようというものである。これは、従来の日本文学が海外との関係を語る時、常に日本側に軸足を置き、彼からの影響を論じて事足りりとしてきたこと、その対象は中国に集中していたことに対して、それをドラスティックに展開させたものである。姜氏の視野は、「日本文学」特に日本古典文学は何故に研究されなければならないのか、それは「日本」理解のための「日本文学」という閉じた空間での営みなのか、その「日本」理解の軸足は日本のみなのか、という問いをも内包している。それは同時に「日本文学」の可能性を切り開く視座でもある。そこで、本学術フォーラ

ムは、姜 錫元氏の基調報告と、文学史の各時代を越えて散文、韻文、芸能の諸ジャンルをからませた学際的なフォーラムを企画した。表題を「日本文学、その可能性」とした所以である。

2 プログラム

第一部「日本文学、散文・芸能における可能性」

パネリスト・題目

川崎剛志「始原 と 歴史 を生み出すことば 熊野御幸と縁起を例に」

近本謙介「三国意識の挫折と展開 中世前期南都における神道説の形成」

飯倉洋一「「奇談」史の可能性」

福田安典「堀内昌郷『葵の二葉』 鄙なる地の源氏物語評論」

川端咲子「芸能研究の可能性 研究施設の意義」

司会 姜 錫元・佐藤明浩

第二部「日本文学、韻文の可能性」

佐藤明浩「稻の名を詠んだ和歌をめぐる 源俊頼を中心に」

海野圭介「和歌の秘伝の伝流」

盛田帝子「御所伝授の危機と再構築」

尾崎千佳「秋成と宗因」

近衛典子「上田秋成の和文」

司会 姜 錫元・川崎剛志

基調講演

姜 錫元「朝鮮をめぐる秋成国学の世界」

コメンテーター 飯倉洋一

司会 福田安典

3 基調講演概要

姜 錫元氏が、今までの研究論文をもとにまとめられた『上田秋成の研究 朝鮮をめぐる秋成国学の世界』は実に魅惑に満ちている。まず「国学」という言葉自体は、日本での論文であれば誰も注意を払うことがなく、あまりにも当たり前の用語であるが、氏の論文に踊るこの用語の指し示すものは、実は「日本」に対する「学」である。すなわち「国学」という日本文学研究者が無意識に使うこの用語は、氏によって対外的な意味が付与され、しかもその論点の軸を「朝鮮」に置くことで、従来の「国学」研究ではありえない視野が提示されることとなったのである。この著書は、韓国における「縦書き」の日本文学研究書の嚆矢、海外における最初の上田秋成研究書であるとの評価もさることながら、この点にこそ学問的価値を有しているのである。本フォーラムでは、姜氏にその骨格を講演して頂き、日本の上田秋成研究者を代表して飯倉洋一氏にコメンテーターを要請した。

【朝鮮をめぐる秋成国学の世界 姜 錫元氏】

宣長と秋成との間で行われた論争として、呵刈葭論争がよく知られている。この論争の本質の解明には、その出発点ともいべき藤貞幹の著作『衝口発』の緻密な検証が必要である。このいわゆる「国学」上の論争は、実はその根底にあるのが朝鮮問題である。古来から日本は中国及び朝鮮とさまざまな文化的交流を持ってきた。にもかかわらず、現在に至るまで、日本の側からは中国文化との交渉、及びその影響ばかりが取り上げられ、朝鮮とのそれは等閑視されてきたと言ってよい。宣長と秋成との論争の根底に朝鮮があるにもかかわらず、今までにこれを正面から取り上げたものはなかったのである。

この呵刈葭論争のうち、日の神論争は、宣長が著わした『鉗狂人』と、それに対して秋成から発せられた疑問、それへの宣長の返答を宣長が整理編集した『鉗狂人上田秋成評同弁』によって論じられてきた。しかし、その発端たる『鉗狂人』が貞幹の『衝口発』に対してなされた反論書である、ということ念頭において、改めてこの三書を比較検討してみると、実はこの一連の論争は、朝鮮に対する意識に端を発していると置き換えることができる。『衝口発』に対する宣長の反論は三十五項だが、そのうち朝鮮と関係があるものは十九項を数える。そして、その批判の態度を見てみると、都合の悪いことは省略する選別的対応、ヒステリックな非理性的対応、そして朝鮮に対する否定的認識が顕著である。一例を示せば、古代朝鮮語と古代日本語との関係という現象に言語学的に正面から立ち向かうことができず、宣長はただただ狼狽しているのである。『鉗狂人』が書かれるまでに『衝口発』出版から五年も要したということも、その狼狽を裏打ちしている。『玉勝間』では朝鮮との言葉の一致を渋々認めているが、それを朝鮮からの影響とすることは、宣長にとって無欠点であるべき皇国の権威を傷付けるものに他ならなかった。そのため、そのことは朝鮮がかつて日本の属国であったために起こった、と強調する言葉を付け加えざるを得ないのである。当然、その狼狽は論理に自信の欠如をもたらした。例えば、古代日本を論じる際に、宣長が傾倒した『古事記』に従いながら、要所に『日本紀』を使わざるをえないといういい加減さや、スサノオと新羅との無関係を論証できない、など明らかに狼狽する宣長の姿が看取れる。

一方、秋成にとっても朝鮮問題は難しいテーマであった。しかし、秋成の世界に対する感覚は柔軟であり、それぞれの文化の個性を認め、その交流による言語の通行、交易の結果を、当然のこととして受け止める姿勢が窺われ、歴史文献をそのまま鵜呑みにして信じることのできない秋成は、宣長のように古代日本を理想化することはできなかったのである。日本における朝鮮文化の影響についても、宣長の如き強弁は避け、ある程度それを認める立場に立っていた。しかしまた、藤貞幹の立場に賛成する点があるも、あらわにその態度を示すことはしない。秋成の言説には、彼のバランスの取れた国際感覚を見ることが出来る。そして、いつしか秋成との論争を通じて、宣長の朝鮮に対する言説には変化が見られるようになる。この変化は、秋成 宣長のみならず、日本の「国学」を考える上で見落としてはならない問題でもある。すなわち、宣長があくまでも皇国観に縛られた窮屈な「国学」であるのに対して、秋成はもっと自由な視野を持つ「日本学」として彼の国学を捉えることが可能なのである。

周知の呵刈葭論争であるが、これを朝鮮問題を軸にして捉え直すことによって、日本文学の上にならぬ新たな地平線を見いだせるのではないだろうか。

【コメント 飯倉洋一】

姜先生の御講演は、このたび上梓された『上田秋成の研究』の一部を骨子とされています。本書は、外国人によるはじめての秋成研究の単著ですが、秋成研究史上だけではなく、国学思想研究史上においても非常に重要な意義を持っています。

この本は、秋成の著作を通して、江戸時代における国学の対朝鮮観という問題を扱っています。まず、朝鮮通信史に対する日本人の反応の問題を、秋成の随筆『胆大小心録』を糸口にして考察しています。朝鮮側の資料を駆使している点が新鮮な切り口になっています。次に、朝鮮通信使節の一人である崔天宗が殺害された事件をめぐる、秋成が『胆大小心録』に記述している文章を秋成の寓言論を根拠に分析し、秋成の「憤り」を読みとっています。これは従来にない解釈で注目されます。

そして本書の中心になっているのは、藤貞幹の『衝口発』と宣長の『鉗狂人』およびそれに対する秋成の批判をめぐる問題です。姜先生の今日の講演は、この問題についてなされたのです。これは日の神論争と言われる宣長・秋成の思想的論争をその淵源から考察するという意義を持っています。それだけでなく、従来の国学研究にはなかった視点を提示しました。つまり、国学といえば中国への敵対意識として、たとえば、「漢意」に対する「大和魂」という位相で捉えられがちだったのですが、姜先生は、当時の国学者が「朝鮮」をどのように見ていたか、という重要な視点を提示したのです。『上田秋成の研究』の序文を書かれた子安宣邦先生がおっしゃっているように、これは従来の国学研究の盲点を衝いたものでした。

姜先生は、『衝口発』を従来のどの研究よりも詳細に読みこみ、『衝口発』と『鉗狂人』の論点整理をきちんと行い、宣長の感情的反発部分を浮き彫りにしています。その緻密な分析は国学と朝鮮という大きな思想史的領域を拓いていると言えます。さらに『鉗狂人』を批判した秋成の論説を分析し、秋成の朝鮮観を正確に析出し、宣長とは違う国学のあり方を具体的に示すのに成功しました。

私の感想を述べると、姜先生が「常識」「国際的感覚」と呼んだものを、秋成自身は都会的感覚だと自任していたのだらうと思います。大坂生まれの都会人である秋成は、道々しいことを大言して門人を多くあつめる伊勢人宣長を「田舎」者と見ていました。しかし、秋成のこのセンスは思想史的に位置付けると、宣長の国学を相対化することになったということでしょう。姜先生はご講演の最後に、宣長の皇国主義的な「国学」に対して、秋成の学問を、ナショナリズムを払拭した「日本学」だとおっしゃいました。これは今後の国学研究のあり方を示唆する重要な提言であったと思います。

4 フォーラム各パネリスト報告概要（各項目の文責名は末尾に示した）

【始原 と 歴史 を生み出すことば 熊野御幸と縁起を例に】

「神社縁起」とは、特定の寺社、仏神、聖地等の 始原 と 歴史 について、多くの奇跡を交え記しとどめた書物である。多くの場合、寺社により制作・保持され、朝廷や幕府にその靈威を認めさせるため、あるいは多くの人々を信仰に導くために用いられた。そしてその行為は、信仰と加護の関係に基づく経済行為、すなわち荘園・財産・金品の寄附・保全と密接に結びついていた。

「神社縁起」には、固有の時間・空間意識の下、神聖な 始原 や靈験にみちた 歴史 が叙

述され、それゆえ正史『日本書紀』や史書『古事記』『古語拾遺』『先代旧事本記』に載らない記事や齟齬する記事も頻出した。時にそれが経済上の利害を生んだり、国家の存立と関わる重大事に発展することもあったが、そのときでも一方的に「縁起」が非難されたわけではなく、「縁起」の文脈を組み込んだ日本の 始原 と 歴史 の再構築が迫られることもあった。いまその一例として、院政期の「熊野縁起」を取り上げる。

平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて、天皇を退位した上皇（院）のひとりが聖・俗両面で最高権力を握り、伝統を総括し革新した時期があったが（院政期）、その最大の革新のひとつが熊野信仰であった。紀伊半島の南端よりやや東に位置する「熊野」は『日本書紀』にその神名・地名が載り、『延喜式』神名帳にも二座が朝廷神祇官の祭る官幣大社として載るが、権現への尊崇は白河院治世下で大きな飛躍を遂げた。すなわち天皇家の祖神「伊勢大神宮」との同体説が唱えられはじめると（『江談抄』）、院は自ら足を運んで信仰の意を表し（御幸）、熊野三山の管理主権者たる「熊野別当」を国家の僧位・僧綱制に組み込むと同時に、その宗教的権威の表徴たる「熊野三山検校」を京に新たに設けた。

院の熊野御幸の宗教的意味については諸説あるが、ごく大雑把に言えば、熊野に至る道と聖地とを完全な宇宙と認識し、唯一の正しい道を踏み行う儀礼である。その儀礼を知悉する先達に導かれ、院は精進し、護法（＝守護神）を付け、道中の王子（＝神々）に祈り、聖水で幾度も身を清め、随所で呪文や祓を唱えつつ三山に至る。三山では「縁起」を相伝する在地の祭祀者に迎えられ、そこで法会が営まれ、院の願意が最高水準の作文により披露される。このように熊野御幸は身（からだ）・口（ことば）・意（こころ）による儀礼であり、うち口の主要な儀礼に、法会の「願文」「表白」と法楽の「和歌」「雅楽」「今様」があった。

熊野御幸の関連資料はほとんど失われたが、幸い後白河院御幸の資料については断片的ながら有効な組み合わせで残存しており、それにより、「縁起」がそれ自体礼拝・聴聞の対象となっただけでなく、あるときは法会のことばとして作文され読み上げられ、またあるときは法楽のことばとして今様に作られ歌われたことが確認できる。そしてそれら御幸のなかで現れたことばは新たに公のことばと認められ、従前の日本の 始原 と 歴史 に食い込み、その再構築を促したのであった。こうした現象は、人間の普遍的な営為として、いつ、どこでも起こりうるが、その具体例を検証し、ことばの破壊力と創造力をあぶりだすことが、日本文学研究の一つの課題であり、可能性であると考える。

（文責：川崎剛志）

【三国意識の挫折と展開 中世前期南都における神道説の形成】

一 三国意識の挫折

南都（奈良）という場合は、ともすると「古代ロマンの地」という枠組みで語られることも多いが、興福寺が大和国守護職として権勢をふるった中世（鎌倉・室町時代）においては、文化的あるいは政治的拠点としての役割を果たしていた。

日本における仏教伝来に関する諸文芸は、天竺（インド）を起点としつつ、中国や朝鮮半島との深い関わりのもとに綴られている。三国伝来の仏教が華開いた仏法東漸の地として本朝（日本）を位置付けながらも、遙か東の海上に浮かぶ小島としての「粟散辺土」意識が併行して綴られる点に、仏教を介した国家観が端的に示されることとなる。

院政期末に仏法東漸の都という意識を強く掲げた南都にあっては、興福寺僧覚憲の『三国伝

灯記』などが著されたが、そうした意識は、平重衡の南都焼き討ちによる堂塔廃滅をもって一端頓挫することとなった。奈良時代以来の荘厳たる伽藍と堅牢な学問の蓄積としての経典・聖教類の存在無くして、それは成り立ち得ないからである。

二 南都再建事業と新たな神道説の形成

ここに、南都における堂塔再建と同時に、自らの存在基盤に関する論理的再構成が要請されることとなったのである。

その中心的役割を担ったひとりが、興福寺僧解脱房貞慶であったと思われるが、彼の著述から窺えるのは、藤原氏の氏神である春日信仰を取り込んだ濃厚な神祇信仰である。

たとえば、春日第一宮の本地仏は空羅索観音であるとされた一般的な在り方に対して、それを釈迦如来であるとする考え方は、春日の地を釈迦浄土であるとの意識にまで高められ、喧伝されることとなる。

こうした南都における言説は、天皇家の権力の拠り所として持ち出される伊勢信仰や、源氏との関わりを記す八幡信仰などとも関わり合いつつ、鎌倉時代の諸権力基盤が、本地垂迹思想に基づいた各々の存在基盤を理論化した営みと位置付けることが可能なのである。

三 中世神道説の文芸への拡がり

この時期に顕在化する言説として、天竺の仏跡荒廃の記述をあげることができる。鎌倉期の説話集の多くには、天竺への仏跡巡礼に赴こうとする僧侶に対して、天竺に仏法の聖地としての面影はなく、仏跡はすでに荒れ果てていることを説く言説が頻出する。この言説は、裏返せば、本朝の仏法東漸の地としての位置付けへの欲求の強さを物語るものである。

中世初頭に南都において形成された神道説の影響を、後世の謡曲 春日龍神 などは受けており、鎌倉初期に南都において形成された言説の、文芸への流入が確認される。

鎌倉期に天竺への巡礼を願った僧侶として明恵がいるが、明恵の渡唐を春日大明神が制止する話柄は、『春日大明神神現伝記』等に綴られて著名である。ここでの春日大明神の託宣こそが、自らの本地仏は釈迦如来であり、それ故荒廃した天竺の仏跡へ赴く理由はなく、南都春日の地こそが、現在の仏法の聖地であると説く、中世初期に南都において形成された春日本地説に基づくものなのである。

ここに、院政期末から鎌倉初期にかけて展開した本地垂迹説の影響の大きさが窺われ、中世の南都を考えることは、文学史のみならず文化史を考える上からも重要な課題であることが認められる。
(文責：近本謙介)

【「奇談」史の可能性】

近世文学研究において、その扱いが難しいのが、享保から宝暦にかけて、すなわち浮世草子の衰退期に平行して盛んに出版された、半紙本数冊の形態の、当時書籍目録において「奇談」と呼ばれていた書籍群である。これらの中には、現在のジャンル認識で、「浮世草子」「読本」「滑稽本」「談義本」のほか「随筆」「教訓書」、さらには「農業書」「地誌」など文学史では扱わない書物も入ってくる。

書籍目録の分類としての「奇談」とは、現在の語感でいうところの「珍しい話」という語義はもちろん含まれるものの、当時の用いられ方を検証すると、語り手と聞き手のいる場を前提とした面白い語り(咄)という語義で捉える方がよい。読本の祖とされる『英草紙』はそのような「奇談」の文学的土壌の中から生まれたと解することでその意義が明確化しよう。ところで、

「奇談」の大部分は短編説話（小説）集であるが、それらの多くが、その枠組みに、語り手と聞き手のいる場を設定している。その場を具体的にイメージするとしたら、享保期にとくに盛んであったと見られる 談義の場 と、短編説話集編纂の方法として意識的に採用された 咄の場 である。（以上、飯倉「奇談から読本へ」（『日本の近世12』、中央公論社、1993）、同「「奇談」の場」（『語文』78、大阪大学国語国文学会、2002参照）。

このような前提のもとに、現在の近世小説史では隙間ともいえる享保から宝暦明和にかけての散文史の中に「奇談」史というものを仮設することができるのではないかと。試みに、宝暦書籍目録と明和書籍目録の「奇談」を抜き出して、刊行年代順に並べてみると、いくつか注目すべき点がある。たとえば、宝暦四年の「奇談」書の輩出は、談義本史研究で言われているように、宝暦二年刊行の『当世下手談義』の追随作・批判作が多く書かれたことによるだろう。しかし宝暦四年刊行の談義本評判記『千石篩』によれば、『当世下手談義』の教訓臭は既に飽きられていた。その反動が如何に現れ、作者や版元はどのような模索をしたのか。従来の談義本史は、そこから、一挙に平賀源内の『根無草』『風流志道軒伝』の誕生へと飛び、教訓談義本から滑稽談義本へ という図式を描く。しかし、その前に実は検討しなければならないことがある。それは宝暦五年にも宝暦四年に劣らず「奇談」書が多く出版されているということである。しかもそれらは、『当世下手談義』の呪縛を逃れて、新しい試みを模索しているということである。その試みを「奇談」史上に位置づけるならば、それは短編説話集の場を意識的に設定したということになるだろう。当代社会における談義や咄の盛んが、その背景にあることは云うまでもない。

（文責：飯倉洋一）

【堀内昌郷『葵の二葉』 鄙なる地の源氏物語論 】

『源氏物語』という日本の作品の中でも海外に広く知られている作品は、その有名さに比べて、謎の多い作品である。この作品をいったいどれだけの人が通読したのか。その通読した人は、この作品から何を読み取っていたのか。この簡単な問いにすら答えることが出来ない「有名な」作品なのである。

本フォーラムでは、日本の一地方である愛媛（伊予）、その中でも中央部から離れた島で親子2代にわたって研究、完成された源氏物語評論『葵の二葉』を取り上げ、江戸から明治にかけての『源氏物語』について一考を試みる。

『葵の二葉』は、1839年に初案が成立し、1858年に完成した。『源氏物語』の登場人物から二人づつを抜き出し、並べて評論することで、作者の意図や作品の真意を読み取ろうとするもの。作者の堀内昌郷は、この時期の「知識層」とされる武士や儒者ではなく、また国学者や神官でもなかった。方法論上の師匠は、宣長の流れを汲む藤井高尚であったが、それとて直接に文学研究のイロハを手取り教えてもらったわけではなく、文通による指導であったものと思われる。愛媛の沖に浮かぶまさに「孤島」において、独学に近い形で『源氏物語』を研究し、彼の没後にその研究を引き継いだ子息の匡平にいたっては、父以外の誰にも指導を受けず、父の残した蔵書やメモ類のみを頼りに、いまだに『源氏物語』享受史に名を遺す研究をなしたのであった。

堀内家の学問態度は、ただただ『源氏物語』を通読するのみであった。他の注釈類は必要とせず、ただ原文を暗記するまで読む、その愚直な行為が、堀内家で実践されていたことは、『源氏物語』享受史のうえで少なからぬ問題がある。すなわち、堀内家以外にも、当時の日本には『源氏物語』を暗記するまで読む、という例は多かったのではないだろうか、という問題提起が可能

である。

『葵の二葉』でいう所は、宣長の言う「ものの哀れ」にとらわれないこと、仏教的な解釈を否定すること、当時の一部知識人の唱える戒淫説を取らないこと、などの点でも特異である。しかしながら、蛭巻を中心に物語を捉えようとするあたりは、やはり宣長の影響からは逃れきっていないことも事実である。

『葵の二葉』で主張されることは、『源氏物語』は「教」のために書かれたものであるということである。その「教」とは、「男女の中らひ」であって、ひらたく言えば、女性に対して「男にしたがひ」のあらましを教える、とするものである。この主張は、朱子学による封建社会においては、当然のことであって、その意味では例えば仮名草子の女訓物との大きな差異はない。ところが、この『葵の二葉』で展開される論理を、果たして、江戸期ゆえの稚拙な論旨と片づけてよいのだろうか。あるいは、なんの先入観もなく『源氏物語』を読むとこのテーマを看取する、というのが、日本人の『源氏物語』の読みの本道ではないのかという問いを今のわれわれに投げかけているのも事実であろう。

すなわち、日本人にとって『源氏物語』とは何であるのか、その一つの答えが、この鄙なる地の源氏物語評論にはあるのではないだろうか。

ちなみに、『葵の二葉』は2004年2月に、風間書房から初めて翻刻が刊行される。

(文責：福田安典)

【芸能研究の可能性 研究施設の意義】

日本の古典芸能としてまず想起されるのは、能・狂言・文楽・歌舞伎であろう。古典芸能の、研究者の大半がそのいずれかを己の研究対象としていると言っても過言ではない。しかし、大学で講義をすれば、現代の大学生のほとんどが能・狂言・文楽・歌舞伎を観たことがないだけでなくその区別すらつかない状態であることを実感させられる。そしてそれは、なにも大学生だけにみられる現象ではなく世間一般においても言えることも明らかである。こうした現状の中で、古典芸能を研究対象とする人間は、「芸能研究の可能性」として、どのようなことを考えていけばよいのであろうか。「芸能研究の可能性」を考えるには、当然ながら個々人の研究メの研究のあり方、研究対象へのアプローチの仕方など様々な角度からの追求が必要であるが、また大学生の現状が示唆する世間一般の古典芸能に対する実態を考えると、社会へいかに還元していくかということもまた必要不可欠なことである。そしてそうした面を担うことができるのが例えば次に述べる古典芸能研究センターのような研究施設であると考え。今回のフォーラムに際しては、「芸能研究の可能性」の一つのあり方として、非常勤として関わっている神戸女子大学古典芸能研究センターでの仕事について報告する。

要旨に変えてこの古典芸能研究センターについて記しておく。演劇に関わる研究所は日本には数カ所ある。例えば早稲田大学演劇博物館、法政大学の能楽研究所、関西では立命館のアートリサーチセンター、園田女子学園大学の近松研究所。こうした先行する研究所とくらべると古典芸能研究センターは大学の規模も研究所自体の規模も非常に小さく、まだまだ発展途上の機関である。しかしその目的とするところは、研究所の名前に特定の芸能を冠するのではなく「古典芸能」という広い範囲を網羅しうる名前を付けていることからもうかがえるが、「古典芸能に関する調ク・研究ならびに社会への学的貢献を目的として」あるいは「能楽資料・近世芸能資料・民俗芸能資料を備えて、それぞれの分野はもちろん、より統合的な古典芸能研究ができる施設を」

目指すというものである（パンフレットより一部引用）。そして、その目標を達成するべく専門図書館としての書籍の充実、データベースによる所蔵資料情報の発信、常設展を含む展示による古典芸能アピールなどを行っている。現在私自身は、古典芸能研究センターでその仕事の一つとして能楽関係書籍を専門に出版する檜書店という本屋から寄贈を受けた幕末から明治にかけて実際に謡本の出版の為に使われていた版木の整理に従事している。報告ではこの版木の整理という仕事を通じて感じた研究施設の意義についてもふれることとする。（文責：川端咲子）

【稲の名を詠んだ和歌をめぐって 源俊頼を中心に】

和歌は、日本において、千数百年にわたって詠まれ続けている定型詩である。なかでも、五七五七七の音数律をもつ短歌は、現代にいたるまで、おびただしい数の作品が作られてきた。一つの定型詩がこれほど長く命を保っている例は、世界的にみても極めて珍しいであろう。和歌が、このように長きにわたって多くの人たちに作られ続けてきたのは、なぜであろうか。容易には解けない、しかも本質的な問題である。

古典和歌（便宜的に江戸時代以前のものをこう呼んでおく）を見渡すと、そこに詠まれている事物や用いられている言葉に著しい偏りのあることに気づく。ここでは、和歌に常用される言葉を歌語と呼んでおくが、歌語は日本語の語彙のごく一部に過ぎない。何が歌語として定着し、逆に何が歌に詠まれなかったのかを探り、その特質を明らかにすることは、先の問題を考える手がかりの一つになるだろう。

今回は、歌に詠まれるものと詠まれないものの境界に位置する、「稲の品種名」の問題を取り上げる。稲作は日本の産業において、大変重要な位置を占めてきた。しかし、これを題材として歌を詠むことはそれほど多くはなかった。いわゆる王朝文化の担い手である平安時代の貴族たちにとって、農作業は生活実感を伴うものではなくなっていたのであろう。ところが、少数ながら、稲の品種名を詠んだ歌が平安時代以降の和歌に見出せる。そして、その用例は十二世紀の初め頃に活躍した源俊頼の歌に集中して現れるのである。

稲の品種名については、平川南「新発見の「種子札」と古代の稲作」（『国史学』一六九 1991年10月）により、すでに九世紀にはさまざまな品種名が木簡に記されていたことが明らかにされた。これによって、俊頼の詠んでいる「ほうしこ」「ながひこ」などが稲の品種名であることが確実となった。ここでは、「そでのこ」「ちもとこ（たもとこ）」「ほうしこ」「ながひこ」という稲の品種名を詠んだ源俊頼の歌を取り上げる。例えば、

おぼつかなたが袖のこにひき重ねほうしこの稲かぶしそめけむ

には、「そでのこ」「ほうしこ」と二つの稲の品種名が詠みこまれている。俊頼は、ときに実験的で大胆な表現を試みているが、しかし、現代人の考えるような自由さで新しい言葉を詠みこんでいるわけではない。この「そでのこ」「ほうしこ」も、既往の和歌表現と密接に関わりつつ取り込まれていると思しい。それまで和歌に用いられなかった語が詠まれるには、相応の契機や条件があったとみられるのである。

伝統性のきわめて強い和歌のありようと、表現の可能性を広げていこうとする志向の間には、緊張関係が生じたと思われる。その具体的な様相の一端が、歌語と歌語ならざるものの境界に位置する稲の品種名を詠んだ歌を検討することをおして知られるのである。そこから、和歌の本質とそれが現役の文学であり続ける可能性の動因をとらえる、なにがしかの手がかりが得られると考えている。（文責：佐藤明浩）

【和歌の秘伝の伝流】

和歌の伝授という営為を例に、江戸時代初期の公家社会における成立期（天皇家）・衰退期（三条西家）の和歌の家の様相を探る。『古今和歌集』の秘説の伝授である古今伝授の歴史については、次のような理解が通説と言える。

室町時代に東常縁より連歌師・宗祇へと伝授された『古今和歌集』の講釈と秘伝は、その後、三条西実隆、近衛尚通、堺の連歌師・肖柏などへ伝えられ、それぞれに権威ある秘伝として師から弟子へと伝えられていった。これらの内、三条西家流は、室町末期の当主実枝の死去時に次代を担う公国が若年であったため、歌人でもあった武将・細川幽斎に、その秘説の伝授が託されることとなった。三条西流の伝授を受けた幽斎は、近衛流、肖柏流の伝授資料をも収集し、伝授を集大成した。幽斎は三条西家当主へ伝授を行うと共に、八条宮智仁親王へも伝授を行った。智仁親王から後水尾院へと伝えられた伝授（「御所伝授」と称される）は、その後、明治期まで宮中に伝わることとなる。

名の挙がる細川幽斎、八条宮智仁親王、後水尾院などは、和歌、音楽（幽斎は、太鼓の名手でもあった）、書道、立花などの諸文化活動に秀で、室町末江戸初を代表する文化人として描かれることが多いが、一旦、視点を拮抗する和歌の家（三条西家）の側に移せば、生々しい抗争の跡が見え、そうした視座を得ることは、一面的な理解を相対化するのにも有益であると思われる。

本報告では、次の二点に分け、順次述べてゆきたい。

- 一 **古今伝授切紙とその論理** 多種が伝わる古今伝授切紙の内、三木の口伝を例に切紙の論理について述べる（嘗て新井栄蔵が別種の切紙で指摘した論理にほぼ一致する）。伝授切紙は、和歌の解釈に直接に関わらない雑多な記事を含むため、荒唐無稽とされてきたが、全てがそうであるわけではなく、『古今和歌集』の歌句に対するアレゴリーな層をなし、一種の思想体系を作っている。
- 二 **後水尾院の古今伝授と三条西実教** 三条西実教の言談を聞き取った中院通茂録『古今伝授日記』（京都大学附属図書館中院文庫蔵）の記事を紹介し、幽斎、智仁親王、後水尾院への評価と実教の立場について述べる。実教は、幽斎等の先人への批判を繰り返す。その論拠は、免許が無い点、理解が及ばない点など様々であるが、総じて三条西流の正統に対する他の異端としての認識による。これは、伝授の歴史からすれば尤もの認識であるが、伝授は既に社会的にも最高の権威を持つ禁裏へと伝えられており、実教は、伝授の始祖を頂く家の末流として、後水尾院よりの疑義に対して返答し、伝来の諸文書を進上することでのみ自信のアイデンティティーを保っているかに見える。（文責：海野圭介）

【御所伝授の危機と再構築】

御所伝授は、後水尾院以降の歴代天皇や歌道家を中心に、歌学を伝え、歌道を受ける教育として発達し幕末まで続いた。宮中の歌学を支える基礎であった御所伝授は、近世文化を形成する一勢力として、国学派が台頭して後まなお相当な影響を人々に与え続けたといわれている。初期の後水尾院の時代には、古今集そのものの伝授を中心としていたが、やがて院の偉業を引き継いだ靈元院（後水尾院の十六皇子）によって整備が加えられ、「天仁遠波伝授」「三部抄伝授」「伊勢物語伝授」「古今伝授」「一事伝授」という五段階の伝授として整備されたという（上野洋三「堂上と地下」）。靈元院の歌業を引き継ぐかたちで宮廷歌壇に登場したのが、院の曾孫にあたる桜町天皇である。一歳より靈元院に歌の指導を受けた桜町天皇は、その後、靈元院に劣らぬ精力的

な歌の実作や歌学の習得に努めるが、御所伝授の保持者であった武者小路実陰、中院通躬の相次ぐ死によって、御所伝授の断絶の危機に直面する。通躬は、烏丸光栄・三条西公福・久世通夏（通躬三男）の三人に古今集の講釈の最中であつたが、古今伝授の終了を待たずして通躬が世を去ってしまったのである。通躬以外に御所伝授の保持者はおらず、伝授断絶の危機に際して、桜町天皇は思い切った策をとる。古今伝授が修了していない烏丸光栄と三条西公福に家伝の古今伝授箱の開見を命じ、故通躬よりの直伝とするように指示するのである。これらの出来事について、後世、御所伝授の口伝が絶えたという風聞（冷泉家・猪苗代家の説）や継続したのだという風聞（飛鳥井家）が飛び交うこととなるが、結果的に桜町天皇は光栄から古今伝授を受け、御所伝授を再興することとなる。そのときさらに「一事伝授」を最終階梯に加え、御所伝授をより強固なものにして、幕末まで続く歌道伝授の形をつくるのである。「一事伝授」は、靈元院歌壇を引き継いだ桜町天皇が、御所伝授断絶の危機を乗り越え、全ての歌道相伝の最終階梯として新たに創始した伝授といえよう。さらに桜町天皇は天皇家における歌道入門制度を確立し（拙稿「近世天皇と和歌 歌道入門制度の確立と「寄道祝」歌」『和歌を歴史から読む』笠間書院、2002年）、宮廷文化の中心といえる歌道を、幕末まで存続させてゆく基盤を作るのである。

（文責：盛田帝子）

【秋成と宗因】

上田秋成の文業の始発に「漁焉」「無腸」の号による俳諧活動があつたこと、秋成が断続的にせよ生涯を通じて俳諧と関わりを保ち続けたことについては、先行研究に詳しい。秋成と俳諧をめぐる問題は、当代の大坂俳壇における位置、芭蕉否定と宗因称揚の背景の、およそ二点に集約されると見られるが、この二点の密接な関係性について報告する。

宗因は西山氏、大坂天満宮の連歌所宗匠を務めた連歌師である。松永貞徳と京俳壇を中心とする貞門俳諧の時代を経て、寛文（1661～）延宝（～1680）期の大坂に、後に談林と呼ばれる一派を出現させた、新風俳諧の祖としても知られる。貞徳・宗因以後、芭蕉の登場、その門下の活躍があり、宝暦（1751～）期以降の俳壇は、都市地方の別なく蕉風俳諧に統一されていく。そのような風潮のなか、安永六（1777）年に刊行された宗因句集『むかし口』は、巻頭に長文の宗因伝記「梅翁伝」をすえた、秋成の宗因愛好を顕著に示す資料である。「梅翁伝」において秋成は、当世においては「あだ言」として評価の低い宗因俳諧を弁護し、逆に、俳諧を聖人の道になぞらえる見方こそ、詩歌の遊びの本義に反すると、蕉風俳諧を攻撃している。ここに批判されたのが、芭蕉その人でなく、芭蕉をことさらに俳聖と仰ぎ、俳諧に道々しい教えを吹き込む精神であることに注意されたい。大坂俳壇の大立物の一、淡々は、『列仙伝』に戯画化されるように、芭蕉の名のある伝書を、ことごとく頻繁に門人に買わせることで勢力を保持した人物である。秋成の批判の矛先は、例えば淡々系一派のごとき、今の世の蕉門俳人のあり方に向けられていたと思われる。

秋成はまた、安永十（1781）年の宗因百回忌を目前として『むかし口』を編んだ、といい、宗因系を標榜する者の存在も暗示している。宗因風が「あだ言」とおとしめられている状況とあわせみると、宗因志向が秋成ひとりの好みに留まらない点は、近世中期の大坂俳壇の構造を知るに有効であろう。若年の秋成が私淑した一炊庵初世こと小野紹簾には、宗因俳諧への傾斜は見出せないが、一炊庵系二世を称した几掌は、自らを梅翁の末弟と宣伝して「檀林坊」を名乗った。几掌が宗因系を打ち出した動機は、蕉門への対抗姿勢にあつたのかも知れない。しかし、元来は貞

徳系伝書である『天水抄』の一本に、宗因 紹簾 几掌の伝系を書き加えるなど、二世以降の一炊庵にあって、宗因顕彰の方法は、蕉門俳人における芭蕉神格化のそれと選ぶところがない。さらには、三世一炊庵こと泊帆が、寛政十二（1800）年、『むかし口』の板木を流用して、『宗因俳諧発句集』なる改ざん本を出版している。その序で泊帆は、宗因句集編纂の功を自らに帰し、俳諧の「道」のしるべとなるべく版行したと述べる。また跋を寄せた月居は、『去来抄』を引用しつつ、「道の聖」たる芭蕉も宗因に敬意を表したという一点に、当書の価値を委ねている。『むかし口』が秋成の業績であることは長らくの間忘れ去られるに至り、のみならず、秋成が最も嫌った道学的な俳諧観に『むかし口』も覆われることになる。

この改ざん一件に対する秋成の発言は認められない。蕉門に対抗するにせよ、それと協同するにせよ、門派の事情からする宗因顕彰と、秋成の内なる宗因とは、そもそも、全く異なったものであったことが想像される。『むかし口』『梅翁伝』における宗因称揚は、その俳諧を連歌の余技と看破したうえでの評価であり、現在の宗因研究にあっても有益な視点を提供してくれている。俳諧はきわめて多数の人間が関わった文芸であって、述べ来った俳壇派閥の事情は不可避の研究課題として横たわっているが、秋成の内なる宗因観は、俳諧とは何かというきわめて根源的な問いを提出してもいるのである。（文責：尾崎千佳）

【上田秋成の和文】

日本古典語の文章表現には、和歌、俳諧、漢文、和漢混交文など、さまざまなものがある。しかし、このような文章表現のうち、特に散文の形、文体、といったものについては、未だ十分に検討されているとは言いがたい。日本人は平仮名を完成させ、初めて自在な表現の方法を手に入れたが、仮名で書かれた初めての公的な文章が『古今和歌集』仮名序であることに象徴されるように、文章は和歌に従属し、和歌に寄り添う形で発展してきたと見てよいであろう。中国のような独立した文章論などは存在せず、文章はジャンルで規定されているように見える。江戸時代を例にとってみれば、浮世草子、読本、洒落本、手紙文など、書く内容の違いに応じてそれぞれに文章が変化する。

しかし江戸時代に入って、国学研究が盛んになり、外国への対抗意識が高まる中で、「漢文」に対置されるべき日本の文章「和文」を模索する運動が起こってきた。意識的に文章を考えようとする新たな動きである。近世は、先述のジャンルによる違いも含めて、さまざまな文体が意識的に試みられた時代といってよい。

今回、このフォーラムで取り上げたいのは、上田秋成の和文である。「和文」とは何か、という基本的な点についても未だ曖昧な研究分野であるが、まずは具体的に文章を読み込むことから始めたい。その積み重ねによって、自ずと「和文」のあり方も明らかになってくるであろう。秋成は初期の浮世草子『諸道聴耳世間猿』、読本『雨月物語』・『春雨物語』、随筆『胆大小心録』などを読み比べてもわかるように、見事に文章を描き分けることのできた人物で、和歌も俳諧も戯作も硬質な文章も、自らの思いを載せる器として自在に操った。その秋成最晩年の歌文集である『藤簍冊子』巻四より、「落葉」を取り上げる。

本篇はさる高貴な人（国学の弟子であった正親町三条公則）の求めに応じて書かれた文章で、春と秋とのどちらが優れているか、という、いわゆる春秋優劣論となっている。少々わかりにくい書かれ方ではあるが、内容からは大きく三つに分けられる。まず第一段で、古来有名な春秋優劣の論を挙げ、秋を愛した万葉歌人、額田王を最も高く評価する。第二段では秋成自身の志向の

変化を述べ、年老いた今は春が待ち遠しい、という。第三段では公則が秋を愛することを称え、公則の庭の落ち葉を愛でる和歌を詠み、締めくくっている。単純な一篇に見える。しかし、この作品の背後に『源氏物語』の世界が隠されていることに気づくと、作品世界は一変する。冒頭の、はっきりとは明示されない人物は、光源氏の恋人、紫上であることがわかる。そしてこの作品には、紫上と秋好中宮との春秋争いに重ねて、秋成と公則との春秋優劣論が仮想されているのである。そう考えれば、最後の和歌一首の意味も、自ずから明らかになってくる。つまり、この作品は、単純な落ち葉をめぐる一篇に見えながら、言葉一つ一つに意識を張り詰め、引用した古典を十分に生かし切った作品なのである。秋成の目指した和文の一つの理想が、ここにあるのではないだろうか。

(文責：近衛典子)

5 おわりに

本フォーラム第一部では、散文と芸能を中心にして、縁起や南都再建をめぐる資料、出版、地域資料、芸能研究の施設、といった従来の文学研究では扱われない、いわば周縁のものへのトレース、第二部では韻文を取り上げ、素材、伝授といったものからのアプローチと、秋成の俳諧・歌文の研究のありようを提示した。そこに、韓国に軸足を置いた姜 錫元氏の講演をからませ、今の日本文学が持つ可能性の一端を示し得たように思われる。可能性の提示というのは、すなわち限界性の提示と同じ物言いであって、「日本文学」研究が今後発展するためには、かかるアプローチが必要であり、そのためには外国人による独自の視点を持つ日本文学研究への参入が待たれている。そして、このフォーラム報告がそのための有力なアプローチの一助となることを期待している。

(2003年10月23日受理)